あいだのすみっこ不定期漫遊連載　第14回

<詩の翻訳は化膿か？>　金素雲『朝鮮詩集』の訳業と土田麦僊の風俗画を繋ぐもの
――植民地絵画の読解のために

稲賀　繁美
（いなが しげみ／国際日本文化研究センター、総合研究大学院大学）

金素雲（1908-81）による日本語訳『朝鮮詩集』（岩波文庫，現在品切れ）を密かに愛唱する人は多いだろう。1929年の『朝鮮民謡集』が北原白秋の激賞を受け，1933年には長期にわたる採取の成果たる『諺文朝鮮口伝民謡集』が，新村出，土田杏村らの後援を得て，表題のとおり，全文ハングルで出版される［本件については，長谷川郁夫「美酒と革嚢」『図書新聞』2634号，2003年6月21日付をご参照］。これを原本とした『朝鮮童謡選』『朝鮮民謡選』は1933年，岩波文庫として世に問われる。訳詩集『乳色の雲』は1940年，島崎藤村の序文を得て河出書房より刊行。戦時下にもかかわらず，1943年にはさらに『朝鮮詩集』前期，中期二冊の刊行を見る。母語による表現の可能性が政策的に窒息に追い込まれてゆくなかで，支配者の言葉に託してでも民族の感情を訴えようとした訳者の意思は，一貫している。

「愛ほしや野に咲く菊の／色や香やいづれ劣らぬ／野にひとり咲いては枯るる／花ゆゑにいよよ香はし」と始まる異河潤（1906-74）の「野菊」（1939）は『朝鮮詩集』の序に置かれている。それは「野の花のこころさながら／この国に生へる詩人（うたびと）／ひとり咲き　ひとり朽ちつつ／偽らぬうたぞうれしき」と続く。林容澤も指摘するように，そこには「秋草のいづれはあれど露霜（つゆじも）に痩（や）せし野菊の花をあはれむ」（1904）といった伊藤左千夫の和歌に通じる抒情がある。だがまだ「この国」とはほかならぬ亡国の故国であり，自らは枯れつつ，歌に偽らぬ心情を託す詩人の姿勢には，異国支配への精一杯の批判が透けてみえる。だが，その自由律の原文を，訳者はなぜ，既に時代遅れとも見える，典雅な文語定型詩に改編したのか。

李章熙（1900-29）の「虫の声」（1929）を見よう。金訳には「虫の声の冷え冷えと沁み入るわびしさ！」「心は涯しない曠野（あれの）をさまよふ」などとある。日本語に親しんだ読者をして，芭蕉の「岩に沁み入る蝉の声」や「夢は枯野のかけめぐる」といった詩的連想へと誘うことで，朝鮮の詩情を伝えようとする訳者の意図は，そう指摘すればやや露骨なほどだ。さらに朴龍喆（1907?-38）の「故郷」（1931）は，「ふるさとを恋ひて何せむ」と始まり「はかなしやふるさとのゆめ／いまははた踏みしだかれて／契りつゝ人に堰かれし／初恋のせつなさに似る」と終わる。その訳詩第一聯最後には，「村井戸も遷されたらむ」とある。藤間生大は，『文学』（1954）で，村井戸の移動を，総督府による開化政策――「日本帝国主義」――による強制移住の結果であり，この詩は農村の疲弊と崩壊と描いた抵抗の歌だと解釈した。だが，実は問題の「井戸」，原詩では<村前の小川も昔の位置から変わっている

「詩の翻訳は化膿か?―金素雲『朝鮮詩集』の訳業と土田麦僊の風俗画を繋ぐもの―植民地絵画の読解のために」
『あいだ』90号、2003年6月20日、7-10頁

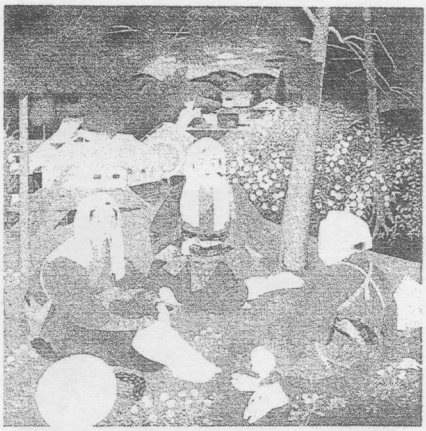
だろう>という意味の句があったのを，金素雲が意訳したもの。その金素雲は，この一編はあくまで叙情詩であり，それを「日本帝国主義」と結び付ける藤間の見解を「盲めっぽうの論理」[ママ]にして「正気の沙汰とは思えない」と罵倒した。ここには詩を特定のイデオロギーに還元しようとする傾向に対する訳者の強烈の違和感とともに，あくまで抒情に普遍的な懐旧を汲もうとする態度が表明されている。だが詩を政治から救おうとする選択には，別のジレンマが付きまとう。

佐藤春夫（1892-1964）は『朝鮮詩集』に寄せた「朝鮮の詩人等を内地の詩壇に迎へんとするの辞」でこう述べる。この詩集にみられる「さゝやかにつゝましく切々たるあはれさは，さながらに霜にうつろふ一茎の野花のごとく，またその根元に枯れ声を立てたきりぎりすの歌とも聞きなされる」と。訳者，金素雲の語彙選択や抒情性の強調が，見事に功を奏して，佐藤春夫の琴線に触れた様子が見て取れる。だがこれは見方によっては，朝鮮の詩魂を，あまりに安易に日本側の情緒へと近づけ，当時流行の「日鮮同祖論」に文学的な裏付けを与えることに加担したとはいえまいか。「寧ろ［読者は朝鮮の詩集に］，アジア古来の暗恨幽愁の，我等が幽玄の趣に相通ずるものを見るであらう」と『風流論』（1924）の作者，佐藤春夫が続けるとき，この危惧は図星となる。さらに言えば，佐藤の『風流論』を知る金素雲が，日本風の「もののあはれ」や「さびしさ」に擦り寄った訳文を『朝鮮詩集』で提供して，佐藤の好評を誘ったという背景，さらには日本の詩愛好家一般の歓心に取り入った，という推測すら可能となる。

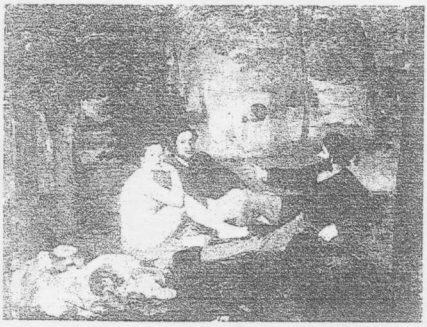
さて，1943年刊の『朝鮮詩集』の扉には，藤島武二の「金剛幻想」と題するクレヨンに水彩の挿絵が飾られている。両肩を露にして頭に花束の乗った籠を負う娘の姿は，藤島が1913年に描いた油彩「花籠」を流用したものであることが明白だ。「花籠」ではチマ・チョゴリだった娘は，どうして「金剛幻想」では半裸といってよい姿に描きかえられたのか。この一種プリミティヴィスムの趣向を加えた藤島の挿絵に，朝鮮

藤島武二　金剛幻想　1943

藤島武二　花籠　1913



土田麦僊　大原女　1927



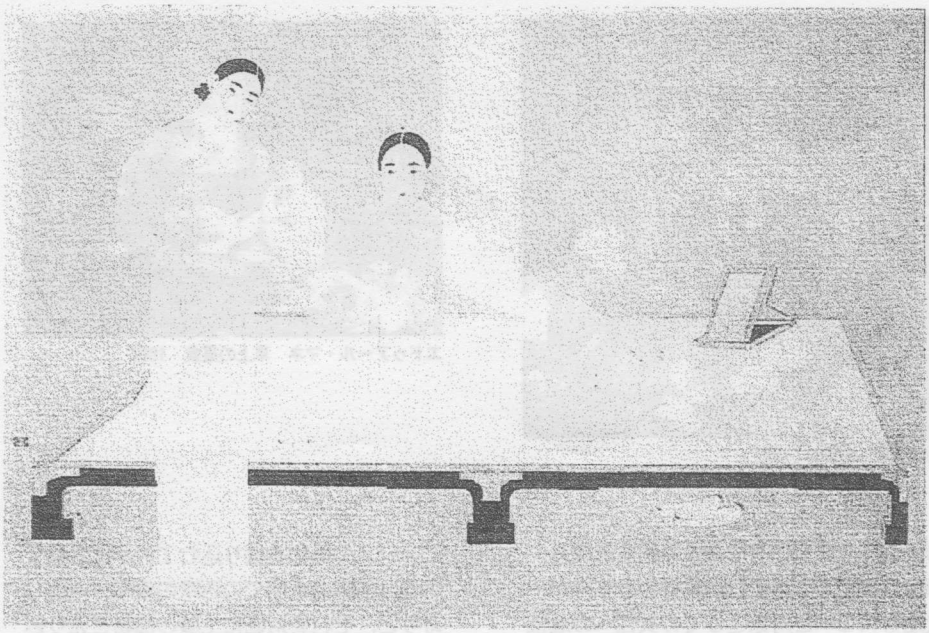
エドゥアール・マネ　草上の昼食　1862

の後進性，野蛮性を強調する底意を探り，植民地支配下に置かれた朝鮮の有り様が，支配されるべき対象としての女性への蔑視に重ねられた，とする解釈も，最近なされている。労働に勤しむ民族衣装の女性を描くことが，植民地絵画の定型だったことは疑えず，東京美術学校教授にして「鮮展」審査員も務め，満州に旭日を描いた藤島の，政治的立場は否定すべくもない。だが問題はさらにその先にあろう。

頭上に荷を負うという女性像は，なにも朝鮮固有ではない。日本でも京都なら大原女が知られる。あるいは秦氏など朝鮮系の「帰化人」のお土地柄ゆえの風習なのか否か，歴史的背景は詳らかにしない。とまれ大原女の姿は，同時代，土田麦僊ら，京都の国画創作協会の画家たちも好んで取り上げた主題だった。とはいえ，なにも麦僊の「大原女」(1927) と藤島武二の「花籠」との類似性を根拠に，藤島を「植民地主義者」たる境涯から救出しよう，というのではない。むしろ問題にしたいのは次の点だ。すなわち麦僊は「大原女」(京都近代美術館) の構図を，エドゥアール・マネの「草上の昼食」から借用したが，その麦僊はさらに同じマネの「オランピア」を意識しつつ，朝鮮のキーセンをモデルに「平牀」(1933) を制作している。ここには，泰西名画の構図を流用し，それを手段として，美術の世界にアジアの風物を盛り込む工夫がなされている。構図の水準での西欧の規範への擦り寄りと，それを対価に土着の風物を売り込もうとする姿勢。その背後にはゴーギャンのタヒチ風物に親しみ，それを日本や朝鮮に適用しようとした麦僊の工夫もあった。そして，ことの善悪はさておき，その延長上に現れたのが，ほかならぬ藤島武二の「金剛幻想」の，半裸体の朝鮮女性でもあったわけだ。

麦僊らの作戦をこう分析してみるならば，そこに金素雲が朝鮮の詩を「内地の詩壇」へと迎えさせるため講じた手段との親近性も見えてくる。佐藤春夫らを懐柔すべく，朝鮮の詩情を日本美学「詫び」，「寂び」に重ね合わせた上で朝鮮風俗の地方色を添える，という金素雲における文化翻訳上の工夫。それは，西洋画の文法を借用したうえで，そこにアジア土着の風物を描くという，麦僊の世代が試みた東西融合の実験の，東亜版・縮小再生産となっている。

したがってもはや問題は，大原女を描いた「国画」創作協会の麦僊に国粋主義者のレッテルを貼ったり，キーセンや朝鮮の民族衣装を纏った女性を描いた日本（男性）人画家たちを「植民地主義者」として糾弾することでも，返す刀で，金素雲を朝鮮の魂を日本に売った売国奴，「親日文学者」として槍玉にあげることでもない。もとより



土田麦僊　平牀　1933

こうしたレッテル貼りの不毛を，金素雲は先刻ご承知であった。親日として糾弾された代表的な文学者，李光洙，崔南善について，金はこう語っていた。「種痘というものがあるでしょう。病菌をわざわざ移植して，腫れ物を作った後には大きな疵痕が生じるけれども，その種痘のおかげで体全体は病気から逃れることができます。民族を裏切ったり節操を曲げたといって，今六堂（崔南善）と春園（李光洙）のような人が本国で非難の的になっていますが，そのかたがたが皆さんのようにこの民族，この国を愛さなかったなどとは万が一にも思わないように。そのかたがたはいわば種痘の役割を果たしているのです。誤てる時代の熱病の中にある全民族に代わって，腫れ物になり化膿した犠牲者たちなのです」（『天の涯に生くるとも』）。

対立する文化のあいだの橋渡しになることとは，けっして両者を隔てる河の流れを消滅させることを意味しない。それは両者の隔たりを隔たりとして生き，引き裂かれ，また相互の不信や反感を身をもって熟成させ，発酵させる「腫れ物」の境涯を引き受けることだろう。金素雲そのひとの訳業もまた，我が身を翻訳という発酵装置たらしむることで，詩句を化膿した膿として産出することを厭わぬ，その傷痕として評価する必要があるだろう。

エドゥアール・マネ　オランピア　1862

＊本稿は林容澤氏の講演「詩の翻訳は可能か―金素雲訳『朝鮮詩集』の場合」（国際交流 基金京都支部2003年6月10日）のコメントとして発言したものを林氏の許可を得てまとめたものである。林容澤著『金 素雲『朝鮮詩集』の世界―祖国喪失者の詩心』（中央公論社，中公新書1556，2000年）もご参照ありたい。